



アートリンク
うちのあかり

うちのあかり事業報告2024

Uchi no Akari Annual Report 2024



うちのあかり事業報告2024

Uchi no Akari Annual Report 2024

座談会「うちのあかりと地域の未来図」……	09
たきびつこと、ひとびと……	07
うちのあかり事業内容……	05
新屋地域マップ……	03
目次	

アトリリンクうちのあかりは、障がいのあるひと、生きづらさを抱えるひと等が自由に表現活動をする場として、ここ新屋地域に2018年に開設されました。多様な背景を持つひとの表現を見つめ、日々、仲間たちの創作活動に寄り添いながら、展覧会「あきたアートはだしのころ」や「作品ホームステイプロジェクト」などの事業にも取り組み、新屋地域を拠点にさまざまな活動を続けています。

この地で、ここで、生きること。安心して、ここで暮らすこと。ここが、よりよい居場所であるように。

ありのままの〈自分〉でいられるように。





県道65号線

日吉坂通り

県道56号線



うちのあかり

障がいのあるひと、生きづらさを抱えて心細いおもいをしているひと、学校や施設に気持ちが向かないひとなどがアートを通してつながり合う居場所(地域活動支援センター)。学生や障がいのあるひと、うちのあかりに集うさまざまなひとが関わり合うことで地域ケアのコミュニティを広げています。秋田公立美術大学の学生たちがサポートの中心を担い、学生にとっての居場所にもなっています。

旧石野呉服店

表町通りに構える築70年の町家づくりの建物を使わせていただき、エクステンジ(洋服の交換会)やブックスワップ(絵本の交換会)などを開催しています。

たきびっこ広場

新屋ガラス工房の裏手に位置する、日新保育園跡の広場。草刈りをしたり、雪寄せをしたりして維持しながら毎月第2日曜に「たきびっこ」を開催。たき火を通して、地域に暮らすさまざまなひとが交差し、関わり、つながり合える、安心できる場として継続しています。

斜向かいのアトリエ

障がいのあるひとや秋田公立美術大学の学生らが、何かを制作したり、対話したり、思い思いの時間を過ごす共同アトリエ。

秋田公立美術大学

社会の大きな変動に呼应し、古い概念にとらわれることなく新しい芸術領域の創造に挑戦する大学として開学。「まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学」を基本理念のひとつとし、地域におけるさまざまな活動によってつながりが醸成されています。

多様なひとびとが、共に、さまざまに、ありのままの〈自分〉でいられる場所に。

日本海にそそぐ雄物川河口の左岸に位置し、羽州浜街道の宿場町として栄えた新屋地域。地下水が豊富で、湧き出る良質な水を源とする酒蔵や味噌・醤油、魚醤等の醸造元、うどんや白玉の製造元、さらに数多くの商店がかつてこの地に軒を連ねていました。新屋表町通り近辺には、町家形式の建物や蔵、古くからの社寺などの歴史的な建造物がいまも点在しています。うちのあかりは、ここ新屋地域を活動の拠点として、本拠地である「アートリンクうちのあかり」、「斜向かいのアトリエ」の整備・運営、月に一度の「たきびっこ」や「旧石野呉服店」でのイベントなどさまざまな活動を起こし、多様なひとびとがつながり合う地域ケアのコミュニティを展開しています。

表現

あきたアート はだしのころ
(2024年2月10～17日、旧松倉家住宅)

生きる営みの中から真っ直ぐに生まれてきたアートを、障がいのあるひと、ないひと、すべてのひとで分かち合う場として2015年から開催する展覧会(秋田市からの委託事業)。2023年度の「はだしのころ」は、秋田県指定有形文化財の「旧松倉家住宅」を会場に、「みんなのはだしのころ」(応募作品の展示)と「はだしのスクラッチ」(感覚の対話)の2本立てで開催。「はだしのスクラッチ」では、誰かの傷(スクラッチ)を見たときに自然と溢れ出る感覚と対話して生まれた音や言葉の記録を展示しました。



はだしのころウェブでは、はだしのころをもった作り手の作品やインタビュー等を公開

表現

声上げられずに孤立しているひとたちが、アートと対話を手がかりとして、地域の中で生きる居場所をつくります。

うちのあかりは、福祉制度や教育制度の枠組みからこぼれ落ちてしまい、

場

さまざまなひとがつながり合う新屋地域に広がる居場所



うちのあかり
日々さまざまな出会いがある居場所。長く映画のスチールカメラマンとしてご活躍されていた長浜谷晋氏が撮りためた「うちのあかり」の日々の記録はこちら→



斜向かいのアトリエ
うちのあかりの仲間たちが黙々と制作をしたり、音楽を聴いたり、お茶やお菓子を食べたりして過ごす空間として、また、新屋地域との接続地点ともなる居場所「#ものまちゃんぽ〜」「たきびっこ」「おむすびごろん」などの会場に。



旧石野呉服店
「BOOK SWAP AKITA 絵本の交換会」
地域の皆様からいただいた絵本や児童書を循環させるイベント。返却不要のこどもの絵本・児童書の図書館もあります。交換会のほか絵本の読み聞かせなども。



衣類の無料交換会
「xChange〜服と幸せのシェア〜」
「自分ではもう着ないけれど、誰かが喜んで着てくれるかもしれない服」を持ち寄る交換会。



新屋地域に溶け込む居場所「たきびっこ」
毎月第2日曜、旧日新保育園跡地

対話

作品ホームステイプロジェクト

秋田県内在住の障がいのあるアーティストが制作した作品を身近な場に展示していただくプロジェクト。アートのちからでひとつをつなげ、地域を活性化させたいとの思いから企画しています。2024年度は、秋田信用金庫新国道支店様、株式会社八森運輸様、コミュニティケア大内様に展示させていただきました。



「展覧会やイベントへの出展、参加」



アートリンクうちのあかり展 (2024年9月12～21日、平山はかり店)



新屋ガラス工房の広場で開催された新屋発!ダンスとアートの祭典!「オモテフェス」出展(2024年6月1～2日)



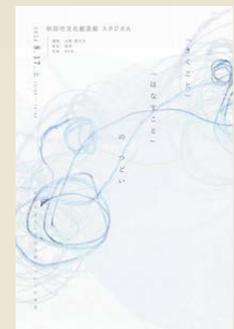
新屋表町界隈でまちと手作り品を楽しむイベント「#ものまちゃんぽ〜」では、斜向かいのアトリエでワークショップを開催(2024年4月13～14日)



はじまりの美術館開館10周年企画「き・てん・き・てん」に、うちのあかりの仲間・戸嶋諒さんが出展(夏会期 2024年8月3日～10月20日、はじまりの美術館)

対話

「きくこと」「はなすこと」のつどい
一緒に生きるための会話についての会話
(2024年8月17日、秋田市文化創造館)



東北地域に「対話」実践のゆるやかなネットワークが育っていくこと、暮らしの中に安心できる対話の場があることを願って企画したイベント。テーマである「リフレクティング」とは、人間と人間が関わる場において、お互いが尊重しながら風通しのよいコミュニケーションを生み出すための工夫に満ちた会話の方法。当日はリフレクティング研究と実践の第一人者である矢原隆行氏を迎え、共に「きくこと」「はなすこと」の会話を重ね合わせたつどいの場となりました。

たきびつこと、ひとびと

写真：伊藤靖史
Creative Peg Works



いろんなひとがいる
良さと、難しさ。
粹のない、心地よさ。

自分の気持ちに一度に、正直に生きていたい。好きなものを否定されず、深めたり、シェアしたりしたい。うちのあかりは、それを叶えられる、大切な場所。(O)



うちのあかりでは、みんなの日常の中に入らせてもらっている感覚で過ごしています。スタッフも、遊びに来るひと、みんな不器用なひとの集まりなのかなと思っています。(M)



たきびつことといえば、マシュマロ
いくつか、夢がある。いろんなひとと出会って、ちからを借りながら、1個ずつ、かなえていきたい。(N)

うちのあかりがなければ、行き場がない。否定しないでいてくれるところって、なかなかないんです。(T)

ずっと、居場所を探していた。

うちのあかりの仲間を見ていると、こんなこともするんだと日々発見がある。自分は、自分に限界を設定していたのかもしれないと、生きる態度に気づいたりする。(Y)



うちのあかりは、気にしなくていい場所。やってみることが出来る場所。大事な場所。いろいろなひとと関わりを持てるのが楽しいから、たきびつことも好き。ここでいろんなひとに出会いたい。(N)



地域の寄り合いのような場が生まれたら。(T)

表現したいと思ってるひとがいて、学生が遊びに来て、美大との連携もあって、制度と制度の隙間にあるからこそ、ここで過ごせるひとがいる。(Y)

安藤先生は、不思議なひとだなと思う。そのひとに合わせて話して、前向きに考えてくれる。どんなこともNOではなく、応じるように、心がけてくれる。(O)



みなさんに、ここで、認められてうれしい。ありがとう。って言いたい。ありがとうって、気持ちがいい。



なんだか面白いひとたちだなと思って。表情がそれぞれ違って。おれの存在は、意識していないだろうけれど。(N)

たきびつこを始めたのは、秋田公立美術大学の学生らと交えた地域活動を考えたとき、たき火のイベントであれば、ひとがゆるやかに集える可能性があると感じたからです。草刈りのときは地域のひととご協力くださったりと、新屋のひとびとの地域活動に対する受容性の高さやあたたかさを感じています。(T)



生きること、生活すること。それしかない。

うちのあかりには、息子がお世話になってます。こうやって、気楽に過ごせる場所って、そうないんです。家に二人きりでいるよりは、ここに來るとひとと出会えて、私の考え方が少し広くなりました。自分で歩き出さないと、という意識も出てきました。(O)



学生たちと地域のひとびとが、日常的な会話を通して親しむ場でもある。

うちのあかりに最初に来たとき、僕は彼にコテンパンに拒絶されて。挫折しかけたけれどここで辞めたらダメいから、根性で関わって、いくうちに受け入れてくれて、めちゃくちゃ面白くて。彼は言語的なコミュニケーションはあまりとろうとしなくて、でもそれに慣れてくると、そのほうが自分も落ち着いてくる。彼のことを、もっと知りたくなっている自分がある。(S)

たきびつこには、うちのあかりの仲間も知らないひとと、学生さんもふらっと立ち寄って行く。うちのあかりと地域との間にある(場)なのかな。すでにあるかもしれない関わりが濃くても薄くでもなく見えてくるような(場)になればいい。(M)





誰かひとりでも、自分のことばを
受けとめてくれる人がいたら、生きていける。
その仮説を実証していくのが、うちのあかり。

写真=伊藤靖史
Creative Peg Works

安藤 うちのあかりの一応、代表をしています。ソーシャルスクエアさんとは結構、活動内容が重なるところもあって。ソーシャルスクエアさんに行っている方がちよつとうちのあかりに来たりとか、うちのあかりに来ている方が、次のステップとしてソーシャルスクエアさんに行きたいという方も多くて。

奥田 ソーシャルスクエアは全国に福祉施設を展開していて、何らかの障がいのある方が企業に就職するためのサポートを行っています。(「こちやまぜ」をキーワードに、障がいや年齢や国籍に関係のない社会を作っていくというイベントをしたり、「こちやまぜタイムズ」というフリーペーパーを発行したりしています。僕は10年ぶりに地元・秋田に戻ってきて、秋田山王店を立ち上げたという経緯です。制度としては訓練のニュアンスが強い施設で、うちのあかりさんはどちらかというと居場所のニュアンスが強いかなと思って見えています。

田村 秋田公立美術大学が設置したNPOで働いている田村です。これまで福祉関係の仕事をしたことはないんですけど、今「たきびっこ」というのをやっています。うちのあかりの活動として、うちのあかりに来られる利用者さん以外の地域の方々も来る緩衝地帯のような場として、月に1回たき火をする場を設けています。

KO 僕は中通でORIENTATIONというシューズとレコードのお店をやらせていただいています。靴販売において、フィッティングが一番大事と考えているので、足にトラブルを抱えた人の悩みを聞いて、どういう靴が合うのか紹介したり、一緒に買い物に行ったり、インソールを調整するなどをメインでやっています。ご紹介いただいて今ここにいらっしゃるんですけども、うちのあかりさんはすごく素敵な企画をされるので、お話を伺いたく来てました。

圓井 うちのあかりには、秋田市から受託している(はだしのころ)という展示会があって。コロナ禍で実展示ができなくてウェブ展示をしたときに、ここに通所している平川慧くんっていう、点描をずっと描いている子とか、はじめさんと安藤さんの音声インタビューなどをやって、それがきっかけでうちのあかりに関わることになりました。僕は脳梗塞で左まひになって、後天的に障がいを持つことになったので、それで引き寄せられたというか。僕自身、自分の日常生活でマイノリティーだなんて感じることも多かったですけれども、うちのあかりに来ると、自分がリハビリセンターに入院していたときのような、自分がいてもいいなっていう感じもあって。今は、自分と近い病気の長浜谷さんっていう、脳卒中で片まひのカメラマンの人の送迎をしたり、(はだしのころ)があるときにはむくむくっと背筋が伸びて計画し始めるみたいな感じで関わっています。

安藤 私自身、誰かひとりでも私の話をちゃんと聞いてくれる人がいたらいいのにと考えた時期があって。だけど焼き物をやっている、個展をする中で、ギャラリーの人がだったりお客さんだったり、いろんな人と作品を通して関わって、自分っていうものを聞いてもらったという実感もあって。仮説として、誰かひとりでも、あなたはこのように状況なのねとか、あなたのことを聞かせてよという人がいたら人は生きていけるんじゃないかと思って。その仮説を実証してみたかったというのが、うちのあかりの始まりです。それと、支援学校の教員を1年やったことがあって。教員生活は、私の未熟さもあってすごくしんどかった。あのときの怒りみたいなもの、自分が何もできなかったということも原動力になって、学生たちやスタッフと一緒にうちのあかりをつくってきたんだと思います。今の場所に来る前は大学の構内で1カ月に1回の活動で、そのあと小さな家を借りてそ

奥田峻史
NPO法人ソーシャルデザインワークス
SOCIALSQUARE 秋田山王店スクエアマネージャー
社会福祉士・フォトグラファー

田村 剛
NPO法人アーツセンターあきた
ディレクター

Ko Noguchi
ORIENTATION FOOTWEAR
ORIENTATION RECORDS&GOODS
シューフィッター/DJ

圓井智哉 (OVO)
ダイレクトレコードカッティング作家
アンビエント作家

安藤郁子
NPO法人アートリンクうちのあかり代表理事
秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻教授
陶芸作家



こで活動していた。そして今ここにきていて。日々問題だらけの中にあっても、生きててよかったな、みたいなこともあったりして、何とか続けています。

地域の中で、自然な状態で、確かにここに存在すること

安藤 今日「地域にひらかれた福祉施設」について、それって何？ どういうこと？ というのを伺えればと思っております。地域にひらかれていくこと、その必要性などについてみなさんと一緒に考えたいです。たきびっこをやっているうちに、地域にひらかれるというよりは、地域の中で自然な状態でいられることの必要性みたいなものを感じて。それってどういうことなんだろうっていうことに悩みながら、でも必要性を感じながら続けています。地域の方とつながりができた一方で、いつも何していいのかわからなくてもう行かないっていう声もあつたりして。何に向かって、何をしています、何がしたいのかとか、地域との関わりで何ができるのかとか。そんなことをもって考えたい。

うちのあかりは日々問題がたくさんあつて、生きていくこと自体が大変で必死な仲間もいる。でも、そういうところとか、現在地みたいなことを自分たちでも確認しながら、未来に向かって進められればいいなという気持ちです。

奥田 うちのあかりさんは、「地域との接



地域活動支援センター「アートリンクうちのあかり」。
日々の記録を書いたり、描いたり。切ったり、塗ったり、句を詠んだり。
白い壁は、日々の制作で埋めつくされている。



してもらえるのかなと思つているときに、福祉に携わっている人たちがその場をひらいていくのは大事だなと。福祉サービスって障害者手帳や診断書が必要になるんですけど、そういうことに抵抗を感じている方もいらつしやつて、結果、サービスを利用しないケースもある。その方の人生を考えたときに、ほんの2〜3年では完結しないこともたくさんあつて。サービス利用に至らない方も関わっていきけるような機会として、ソーシャルスクエアではそういう場の提供もしています。行つて安心できるような場所が地域にいくつかあるというのが、その地域にとって大事なのかなと。うちの場合は就職支援をメインにやつて

いますけど、うちのあかりさんみたいに表現したいところを大切にしているところが地域にひらいていることも同時に大事だなと思つています。いろいろなバックグラウンドのある方が地域にひらいていってということが大事なポイントかなと捉えていますね。

安藤 なるほど。今のたきびっこは、うちのあかりをひらくというよりは、もともと誰でも来ることのできる場所があつて、そこにうちのあかりの人も行くみたいなニュアンスかな。だから接点をつくるというのは、まさにそうだなと。

世の中って一般常識みたいなのがあつて、そこから外れているとすぐに困つた人として扱われたりしてしまう。ちょっと待つてよといつも思う。たきびっこでは、例えば、学生たちがマシユマロを焼いて盛り上がっている。こちでは障がいのある人が、焼いたマシユマロを食べている。別に接点はないけれど、同じ場所にいる。そこには音楽をやっている人がいたり、何かを作っている人がいたり。何となくそういうふうにして、お互いを知りやすい場所になるといいなという思いがあります。

点をつくつている」というイメージがある。たきびっここの活動も、たきびつこつていうものを通じて地域の人たちとの接点をつくつていくというイメージがあります。地域にひらかれた場ということも考えたときに、誰がひらいているのか大事だなと思つていて。地域でいろんな場をひらいている人たちはたくさんいるけれど、福祉施設とか障がいのある方に対応しているところが地域にひらく、接点をつくるということが地域にとって大事なんじゃないかと思つています。いわゆる一般の障がいのある方が何かのコミュニティに入ろうとしたときには、不安なことが多いと思うんです。受け入れられるのかなとか、自分のことを理解



圓井 人がいる所が好きなんもいれば、僕はまだに人がいっぱいいるところは苦手です。でも、何かをやっている、そういう気配は好きなんです。何かが行われているけれども、遠くから見ている、静かに、その景色を。みんな楽しそうにし

ているなっていうのを楽しんでいるパターン。だから、たきびっこみたいなことが行われているのは、新屋という地域の中にあっていうか、関わっているなと。ただ僕は田村さんとかがたきびっこをやっている、ちょっと大変そうだなと思っで見えています。片付けとか、雨のときとかもあるし。服は着替えなきゃいけないし。ずっとやっているのがすごいなと思います、正直。

田村 自分は、目的に対してどういうことをやるのかと考えがちなんですけど、たきびっこに関しては、いろいろな人が立ち寄れる場にたき火があれば何かできるんじゃないかというのが最初の一步だったんです。行ける場所が増えるといいいのかなという感じで。行った先には違う人がいるから、行く人は違う人に出会っていきっていく、そのバリエーションが世の中が増える地域としては良くなくていくんではないかなと。そうすると、話を聞いてもらえるかもしれない先が増えていくのかなっていう気はしているんですよ。

続けていくことが重要なので、やることをめっちゃミニマムにしている。準備は30分くらいで、片付けも1時間からないくらいでできるようにできてきて、学生もどんどん鍛えられてきて。告知に一生懸命にならずにやり続けられる方法をつくっていくと、イベントというよりは地域行事。毎月の地域行事っぽくやっていければ、もしかしたら浸透していく

という感覚をなくしたい。みんな、同じって言うたら同じだし、違うって言うたらめっちゃくちゃ違うし。いろんな人がいるよね、多様だよね、を当たり前にしたい。

圓井 差別を受けてきた人とかが絵を描いたり、詩を書いたりというのは、僕は同じようなものを感じるんです。表現の仕方は違うけれども、近いんじゃないかなあと。ダウン症の子とかは天使みたいな子が多いからすごい乗るし、支援学校でDJをすると誰も恥ずかしくないに踊るし。お互い、ああ、この人、こういうふうにするいな、踊るなあとか。地域にひらくというのは、僕はなんとなくそういうことなのかなと。

KO ヒップホップって、初めは勝手にやっていたものが文化になって、文化が波及して、世界中にいろんなヒップホップがあつてというのが面白い。もともと自分たちの楽しみや表現としてやっていたもの、マイノリティーとか社会的弱者の人たちのカルチャーが、世の中に波及していくっていう。

安藤 私自身も自分がマイノリティーだという実感が少しある。自分の性格もあるんだけど。もしかしたら、みんなマイノリティーにしていると不安だから、すごく頑張ってる人と合わせているのかもしれない。マイノリティーの人が楽しそうにやっているのを見たら、ふと自分の中のマイノリティー性みたいなものが呼び覚ま



「たきびっこ」は、新屋地域の中心である表町通りにある新屋ガラス工房の裏手、日新保育園跡の空き地で行われている。「うちのあかりの人も、地域のかたがたも訪れる〈緩衝地帯〉のような場」と田村

んじゃないかなというもくろみみたいな感じですか。

圓井 意外と気付かなかったけれども、同じことをやり続けるというのが祭りにっぽくなっていくんじゃないかなと。行けなくてもなんか安心するっていうか。たきびっこも、「ああ、きょう、たきびっこやってたんだ」「みんなあれ食ってるのかな」とか。そういうのが増えていけば、革新的なことばかりやらなくてもいい。

KO 僕、DJとしてイベントをしている、定期的にやっていると、それが普通になっていくんですよ。たまに大物のゲストDJがいたりスペシャルなことはあるんですけど、でもイベントとかパーティーっていう箱自体は変わらないので、それがだんだん普通になっていく。それこそ、あ、明日パーティーだよ、レギュラーのパティーあるよねとかいうふうになっていくと、特別感は薄れていくと思うんですけど。なので、あまり特別視しないで、今やっていることをやるとか、それこそ街に絡んでいくとか、街の中に入っちゃうとかのほうがいいかなと思います。

自分の中のマイノリティーが呼び覚まされる場に

安藤 雑に言っちゃうと、普通っていう感覚自体をなくしたいっていうか。みんな一緒がいいね、みんな普通がいいねじゃないかなと思います。

されたりとか、そんな時間になったら、きつといいですよ。話が飛んじやうかもしれないけど、自分の中の野生的な面というか、そういうものがふと解放される場所に、結果的になつたらいいな。でも、そこも無理せず。そうしなきゃいいに思うと、押し付けがましくなるし、自然にそういう瞬間が生まれたらいいなぐらいでいいのかなと思ったり。

圓井 たきびっこって、いろんな人が入り交じって、外というだけあって圧迫感もなく。

田村 そうなんです。そういう場はあったほうがいいなっていうか、そういう場が好きで。こういう場にいることが苦手な人たちも、できるだけいづらくならないようにできたらいいなっていうのは、ちょっと思っています。

圓井 歩いたり、あの坂を上がつたり下がったりして、コーヒー飲んだりして。

田村 そう、散歩したりとか。あと、火をいじっていけば、火をいじっているんだなってみんなから思ってもらえるんじゃないかなみたいな。

奥田 たき火って、最悪、話さなくてもいいじゃないですか。話さなくてもやることあるみたいなことっていいですね。人にどうい背景があるのかって、多分、ちょっとずつ見えてきて、それが



「アートリンクうちのあかり」から、いろいろな人が交差する「たきびっこ」や「旧石野呉服店」、ひとりで制作と向き合ったり、語り合ったりと静かに過ごす「斜向かいのアトリエ」。小さな新屋地域に、さまざまな場が展開していく。

当たり前になつてくるのかなというところがあつて。そういう意味ではたきびっこを継続していくことには意味があると思うんです。ちょっとでも関わり続けていくみたいなのができたらいいなって、いふうに思いますね。

うちのあかりをつくった理由を、

そのままやっていたらいい

安藤 うちのあかりがというよりは、地域が、あるいは自分の周りが、こうなっていたらいいなみたいなことはありますか？

圓井 うちのあかりは、ある意味、サードプレイス的な役割ですよね、多分。斜向かいのアトリエはこぢんまりとしているから、静かに、ひとりになりたい人いい場所。でも（はだしのころ）はもう9年もやっているから、うちのあかり美術館というか、常に見られる場所としてはだしのころ美術館というのがある。いいなと思いましたが、もう、パワーがすごいから。もちろん、障がいのある人は、作品を作るよりもっと大変なことがめっちゃくちゃあることは、少し関わってて分かりますけども。

安藤 美術館やギャラリーであって、かつ実際に関われるというか、いろんなつながりがあるって見えるような、そんな空間ができていいなって、私も思います。はじまりの美術館（福島県）に行ったときに、いわゆる美術館とは質が全然

違う魅力を感じました。単純に言うところ、温かい感じがしたんですね。行ったらうれしくなるみたいな。そういう空間がちっちゃくてもあったらいいなあ。

圓井 作品というよりも、その人の意識とか、痕跡と捉えられたら。

KO それこそ、うちのあかりをつくった理由を、そのままやっていたらいいのかなと思います。

圓井 今、めっちゃいいこと言ったから。始めた理由を続けていけばいいんじゃないかなってのは、とてもいい。ちょっと、僕は欲深かった（笑）。

安藤 いろいろな方に関わっていたんで、助けていただきながら、私はなるべく目立たず、陰にいたいな。奥田さんは、どんなことを感じていますか？

奥田 他県でいわゆる福祉事業に関わって、秋田に10年ぶりに戻ってきて感じたのは、圧倒的に選択肢が少ないことでした。通いたい施設を探すときに、あまりにもバリエーションが少ないというのがある。選択肢がたくさんある状態になつてくると、生きづらさを抱えている方たちにとってプラスになるのかなと思います。アート寄りの活動ができるような施設って、そんなに多くなかったり、なくなっちゃったりというのを他県で見えたので。うちのあかりさんが地域にあ

り続けるというのは、大事なことで、ありがたいことだなんていうふうには捉えていません。それこそ、福祉施設に限らず、ここからつながる地域の何かっていうのもすごく大事だと思つていて。福祉以外のところはどうつながっていいかとかいう、つながる選択肢がどれだけあるのかってのが、大事なところかなって思うので。

差異がなければ、変化は生まれにくい

田村 生きていくのに、やっぱり練習は必要で。練習して、自分に合った方法みたいなものを見つけたらいいなと思うんです。いろいろな場があつて、世の中に出ていくときの練習の場みたいな使い方ができたら、自分も含めてですけれど、生きていくときに少しうまくなっていくっていうか。それによって自分のことが分かっていくっていうか。そういう場所が増えていくといいなという捉え方をしています。

圓井 その練習っていうのは、「古い」とかも入ってくるんですか。だんだん年もいってきたんで、何となく、だんだんみんな、よし、やってやるぞみたいな若い頃の感覚がなくなつてきて。僕は脳梗塞になつて、早めにそれが来たみたいな気が持ちがあつて。何で言ったらいいんだろいうな、うまく言えないな。老いの練習。老人になると障がい者になる人が圧倒的に増えるから。そういう練習とはちよつと違うかもしれないですが。

安藤 そうそう。うちのあかりに来る人って、例えば、学校時代がすばつと抜けていて、明らかに練習期間がなかったから、その経験を経ないでいきなり社会の中でやっていくって、そりや無理でしょう。練習はいろんなことにおいで、ちよつとずつ、老いもちよつとずつ、老いの足跡を聞きながら、練習しているっていうか。

圓井 僕はたまたま、こういう体になつたから感覚が分かりますけども、逆に言ったら、安藤さんとかみなさんとか、体がめっちゃくちゃ悪いとか、後天的に障がい者になつたっていうことではないのに、こういうことに関心があつて関わつたりして。それって結構、僕の中ではすごいなと思います。多分、僕は自分がこうなつていなければ全く関わることもしよう人側にいたと思うんですね。

安藤 大き過ぎる差異も小さ過ぎる差異も変化を生まなくて、適度な差異があるときに変化が生まれるっていうことを聞いたことがあつて。だから、練習でちよつとずつ、いろんなことに触れることができるっていう場所にうちのあかりがなればいいなと思います。日々、いろんなプロセスが積み重なつて。作品を発表したり、それを見てくれる人がいたり、そういうのも全部含めて。対話としてのアートというか。そこはすごく、大事にしていきたいですね。



ここには、
私と、どこか似ているひとたちがいる。
いろんな話し方、いろんな表現。
いろんなひと、いろんな性格のひと。
芯があって、それを見せてくれて。
あ、いいなって。
だから、一緒にいるのが楽しい。

ブラネン新那サイド



うちのあかり事業報告2024

デザイン 越後谷洋徳

編集 高橋ともみ

企画・制作 NPO法人アーツセンターあきた

助成 日本財団

発行 NPO法人アートリンクうちのあかり

秋田市新屋比内町11番16号

<https://utinoakari.com/>

表紙 戸賀瀬友宏

Supported by  日本財団 THE NIPPON FOUNDATION